

月刊フォーラム 第8巻6月号
1996年6月1日発行(毎月1日発行)通巻71号
1991年2月8日 第三種郵便物認可

月刊フォーラム

21世紀へ架橋する知の冒険

金融危機と再編

金融革新とセイフティネットの現代化 赤見誠良

市場と制度 金沢 勝
—— 金融危機のゆくえ ——

日本の金融危機の本質はどこにあるか 池尾和人 + 藤悦子 + 野下保利

アメリカにみる金融手続のダイナミクス 数坂孝志

アメリカにおける大衆的金融の真実 論議 福地 寛

資本移動の自由化とその帰結 若田健治



「左からのアプローチ」

FORUM

1996 6



現代書館

東京都千代田区三崎町2-2-12
電話03(3261)0778 振替00120-3-83725

* 価格は税込みです

柳本通彦

台湾・霧社に生きる

2575円

台湾先住民名替ある一九三〇年の抗日蜂起＝霧社事件。その後を霧社で生き抜いた悲惨なる生涯と人間の尊厳に満ちた人々の証言。アジアの日本が問われている。

中西由起子

アジアの障害者

2300円

元国連ESCAP障害者問題専門官の著者によるアジア20カ国の障害者白書。統計、制度、障害者関連政策、暮らし、当事者活動、関連資料を網羅した基本文獻。

山折哲雄

宗教の行方

2000円

戦後50年、経済成長を享受し続けた日本人は精神的な柱を失い、オウム事件にみられるごとく宗教への関心を高めるであろう。宗教への可能性を縦横無尽に論究。

Mウァレンティス&Aニェウエイン 著 和渡雅子 訳 3000円

女性・怒りが開く未来

愛する前に怒るべし。ダイアナ妃やヒラリー・クリントン、最新映画を題材に女性が怒る本当の理由を解き明かし、その秘められた可能性と豊かさを証明する。

宮岡 悠

公安調査庁の暴走 (仮題)

予価2000円

今、なぜ破防法なのか。公安調査庁の生き残り策の爲の人身御供オウム。公安調査庁は次に何を狙っているのか。初めて明かされる組織・資金・活動・歴史等。

★緊急出版

高速増殖炉もんじゅ事故

緑風出版編集部編◎恐るべきナトリウム漏洩事故及び動燃の隠蔽工作の全貌を総力取材！▼斗ヶ沢秀俊／小林圭／天笠茂祐／明石昇一郎／福武公字／西尾漢他 二五〇〇円

★話題の新聞

高速増殖炉の恐怖「増補版」

原発に反対する福井県民会議◎国民的論議に付すべく平易に書かれた「もんじゅ」差止訴訟の訴状を単行本化。ナトリウム漏洩事故の分析を増補。 四二〇〇円

★話題の新聞

宗教名目による悪徳商法

—日弁連報告書にみるその実態と対策—
宗教と消費者弁護団ネットワーク編著◎宗教に名を借りた悪徳商法の実態調査と対策の決定版。 二五〇〇円

★好評既刊

在日韓国・朝鮮人読本

「リラククスした関係を求めて」——シリーズ⑧
梁泰昊著◎歴史問題から生活全般の疑問に答え、日本人とのリラククスした関係を求める新・共生術。 一八〇〇円



緑風出版

[価税抜]

〒113 文京区本郷 2-27-5 ツイン宅建坂
☎03(3812)9420 振替00100-9-30776

現実に対峙する加藤哲郎氏の政治学

櫻井智志

1 加藤哲郎氏の軌跡

私に加藤哲郎氏の名前を初めて知ったのは、一九七六年に出版された労働運動史研究会の編集に成る『日本の統一戦線運動』に収録された「国崎定洞論」の著者としてである。その後、一九七八年版の芝田進午氏責任編集によるマルクス主義研究年報No2で「ユーロコミュニズムの射程」を読んだ。私に加藤氏に強く関心を抱いたのは、一九八九年の岩波ブックレット「戦後意識の変貌」によってである。六〇年安保闘争から七〇年安保闘争を経て、相次ぐ自治体革新の太平洋ベルト地帯化が実現しながらも、七〇年代後半からしだいに停滞し、八〇年代には後退していった。加藤氏は、占領期からずっと国民の戦後意識を分析して実的に確に、「私生活主義」「企業社会」をキイ概念に変貌を把握され、わずか六〇頁のブックレットで、読者の私に問題関心を

充足させてくれた。

さらに加藤氏はソ連邦の崩壊と「東欧市民革命」（加藤氏）から、「社会主義の危機と民主主義の再生」（一九九〇年、教育史料出版会）、「ソ連崩壊と社会主義」（一九九二年、花伝社）などの著作や「短い二〇世紀の総括」（一九九二年、教育史料出版会）や「戦後改革と現代社会の形成」（一九九四年、岩波書店）などで論文を寄せている。これらの著作で、加藤氏は精力的に国家論を見直し、社会主義の組織原理について論考を進めてこられた。その後、野坂参三氏に対する文芸春秋社による告発の雑誌や書籍が出版されている最中に、「モスクワで肅清された日本人」（青木書店）を出版された。さらにその線上で「国民国家のエルゴロジ」（平凡社）を刊行された。

革新勢力、進歩派の中にはソ連の解体や東欧社会主義の崩壊を前に、沈黙したり転向したりする知識人や市民が相次い

でいる。東大教育学部教授藤岡信勝氏はその典型である。ソ連崩壊により、藤岡氏は日清、日露戦争を日本が近代化するために明治の先人が取り組んだ偉業ととらえる。今までに唯物史観にとらわれ、帝国主義的侵略と偏見でみていたが、それは皇国史観の反動で、新しく自由主義史観によって日本近現代史を再解釈し直すべきとして、そのような教育研究運動を推進している。しかし、加藤氏の航路は全く異なる。氏は研究の初期から一貫して、市民・民衆・労働者の解放という事業を政治学の領域から研究し続けてきた。加藤氏においては、まずはじめに守るべき教条があるのではない。事実をありのままに認識して、それをどのようにに説明しうるかを詳細な事実の綿密な集積に基づいて分析していく。修正すべきは、現実を説明しえない方法論であり論理である。かつてデカルトやマルクスがいったように、世間という書物、現実という

書物を読解する姿、既に背かれたドグマとしての原典を固守しその訓誥学に陥る俗流正統派からすれば、許しがたい修正主義者ということになろうか。けれど、混乱する現代日本の政治的、社会的分析を待っていた私のようなものからすれば、待ち構えたものを得た思いがする。

2 「モスクワで粛清された日本人」

加藤哲郎氏は、豊富なモスクワの秘密書類の山から、現代史の裏面をあきらかにする事実を取り出し、それにとどまらず、論理的な推理と構想力のもとに、戦前にモスクワでおきた事態を読者に提示してくる。ロシア革命によって、帝政ロシアの圧政は崩壊した。それにとどまらず、第一次世界戦争で、帝国主義によって弱肉強食の争いに明け暮れていた世界は、それを否定する政治理念と体制的根柢を得た。だから、ソ連が相次ぐ否定的現象を示しても、いつかはそのような側面を克服して、新しい世界像のモデルたりうる復原力をもつと私は考えてきた。ベレストロイカで再建の兆しをみせながら、ソ連そのものの崩壊に至り、経済的

混乱を示している様相は、共産主義そのものへの失望を抱かせた。あれは他国のこと、日本は大丈夫と思っていたら、野坂参三氏の行動への疑惑がついには、百歳をこえて日本共産党除名という事態に及び、途方にくれる困惑をうんだ。

加藤氏は、野坂氏が山本懸蔵をソ連秘密警察に密告しただけでなく、山本懸蔵が他のすぐれた共産主義者、国崎定洞などを密告していた事実をあきらかにし、さらにはコミンテルン自体が日本人共産主義者全員をスパイの嫌疑をもつてみていたこと、従って、モスクワにいた日本人は、自己を守るために、他者をスパイとして摘発せざるを得ない異常な状況下に置かれていたことを発見した。歴史のあまりの苛酷さは、目をそむけたくなくなるような醜悪さを時にさらけだす。だが、出来る限り予見を避けて、あるがままの事実を冷静にとらえ、その背後にある病理や可能性を分析、摘出することによって、希望がうまれてくる。加藤氏は、単なる反共主義者ではない。わずか五カ月後に、平凡社から『国民国家のエルゴロジ』を著し、二十一世紀にむけた民衆

解放の理念と理論的枠組みを明示してくれている。事実と真実に謙虚な良心こそ、混乱する時代の私達に勇気を与えてくれる。

3 「国民国家のエルゴロジ」

エルゴロジとは聞き馴れない言葉である。加藤氏の説明によれば、それは生態学としてのエコロジーに対比される「働態学」という意味である。この書物は全十三巻から成る書き下ろしの「これからの世界史」という叢書の一環である。田口富久治氏、平田清明氏、小谷汪之氏、伊藤誠氏、いいだもも氏、廣松渉氏など多彩で立場、見解を異にする学者がこのシリーズの研究会の交流によって席を同じにした。副題にあるように、この書物は「共産党宣言」から「民衆の地球宣言」へという構想から生まれた。

現代日本の長時間労働と過労死について政治経済学的研究を進めていた加藤氏は、地球生態系の問題を労働と科学技術、労働と人間の本质の実現とのかかわりで考える。猿が人間になるにあたっての労働の役割とは、エンゲルスがあきらかに

した労働の重要な命題である。しかし、「北」側社会での最先端労働がもたらすストレスによる欠勤や生産性低下は、アメリカでは年間二千億の企業負担をもたらし、イギリスではGNPの一〇パーセントをそのために費やしている。日本の長時間過密労働は、ついに過労死までも生み出した。一方「南」側では、アフリカのモリタニアでは、憲法違反の奴隷制度が残り、内戦下のスーダンでは飢餓や略奪で困窮した生活の中で、十二歳以下の子どもを一人七〇ドルの奴隷で売ることが増大している。借金返済のために、パキスタンでは二千万人（子ども七百万人）、インドで千五百万人（子ども千万人）が農業・絨毯織りの債務奴隷となっている。中南米では、ブラジルのプランテーション農園などで苛酷な労働条件と暴力による強制労働が横行している。東南アジアのタイでは、貧しい家庭の子どもが売買され、工場労働や売春に使われている。

このような全世界の労働の現状がある。多くの国では労働組合は労働者福祉や所得再分配の政策効果に期待し、国民国家

の「半周辺」に組み込まれていったが、地球的規模での階級的連帯や老人・女性・障害者・社会的弱者の「周辺」救済には、無関心となった。かつてのブルジョワジーとプロレタリアートの対立の現代的内実は、国内階級闘争よりも地球的規模の南北問題において深刻となっている。一九九二年にブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開かれた国連地球環境サミットは、加藤氏に、コミンテルン型の国際主義が二十世紀末にはNGO型のそれに、日本から革命の祖国ソ連に国境を越境した日本共産主義者から、国境をこえた医師団のような地球市民型の越境の現段階を象徴させるものとして、深く把握された。加藤氏は語る。

「日本研究を始めたばかりの一人のイギリス人の大学院生から、日本国憲法について、質問を受けた。自分は英語で日本国憲法を読んだ、あんな素晴らしい憲法がありながら、なぜ日本では、社会党（英語では Social Democratic Party という）までが、自衛隊容認・実質的改憲に向かうのか、と。／＼しばらく考えて、私は、こう聞き返した。民主政治の基礎は、

国家制度だろうか、社会関係・運動だろうか、私たちには憲法第九条がある、君たちには反核運動や環境運動、浜辺の保護運動がある、いつたいどちらが、現実に平和を構築するのだろうか、と。」

このように加藤氏にあっては、現実政治の分析に切り結ぶ主題として、この著作の研究がある。共産党宣言は、フランス革命のラ・マルセイエーズを発展させ、インターナショナルへと連なった。共産党宣言が、民衆の地球宣言へと継承されていると、説く氏の理論に異論を唱える人はいるかも知れぬ。けれど、二十一世紀の主人公である青年たちに、よりよく生きる希望をもたらす展望を、懸命に模索し続けた努力と考察の成果がこの書物にあることは、疑いのないことと、少なくとも私は断言できる。

本書の構成は、二部から成り立っている。序章でエルゴロジ概念を明確にした後、一部で「階級独裁国家のエルゴロジ」と題して、戦前のモスクワでおきた日本人共産主義者の群像の悲劇を歴史・政治学の観点から本質に遡及し述べている。第二部では、「二世紀の権図」

として、国民国家、多国籍企業、国家と社会主義、地球市民、民間非政府組織（NGO）の概念を縦貫する形態でエルゴロジの理論を展開している。加藤氏によれば、エルゴロジもエコロジもその言葉を初めて使ったのは、十九世紀後半から二十世紀のドイツの生物学者・哲学者であるエルンスト・ヘッケルであるという。ヘッケルは、人間を取り巻く自然生態系の生理学を「エコロジ」と名付け、人間自身に潜む自然の生理学を「エルゴロジ」と呼んだ。日本では言葉は戦後に人類学者の長谷川言人氏により導入されていた。七〇年前後から研究会がつくられ、八六年に人類動態学会となった。七〇年前後は高度経済成長（資本の強蓄積）によって、自然破壊が公害環境破壊として生態系ばかりか、人間の身体そのものをむしばんでいた。公害による直接的な身体破壊に加え、労働災害・職業病・薬品公害などの頻発は、労働科学者や自然科学者、保健学専門家をエルゴロジに注目させた。人間身体に潜む自然原則から、労働の在り方を改めて問うことになった。加藤氏によれば、エル

ゴロジ研究の中心人物のひとり香原志勢氏は、「人類動態学は、身体各部の使い方や動かし方を精査し、それらの起源を探索し、さらには人類進化、文化発展におけるそれらの意義を検討するよう努める。」と述べているという。加藤氏の方法論は、香原氏の理論を社会・政治の全般に涉って発展させようとするものである。ソ連邦解体以来の歴史が予想させる困難な未来を、社会学者として歴史に対しての責任を帯びて展望しようとする姿勢は、本書を読む者に、著者の倫理的主体としての誠実さを示して止まぬであろう。

4 むすびにかえて

いつでも、後の時代になって歴史的境界をあげつらうことはできる。けれど、同時代において深く歴史の本質を把握することはいかに難しいことであるか。政治学者の多くが、書齋に閉じこもるか、保守主義者として政権担当者のスタッフの仕事をするか、また反体制勢力の党派性においてのみ研究にとじこもるか。しかし、加藤氏はそのいずれにもあてはま

らない。現代政治の本質を変革と学問的厳密さとの双方から相対峙しようとしておられる。そのような営みは極めて困難な営みである。だがそのようなスタンスこそ現実という書物を読み解く立場だろう。私は、法学者の渡辺洋三氏から学ぶことが多かった。団塊の世代と俗にいわれる学者の中で、渡辺治氏と加藤哲郎氏には、柔軟でもあり原則的でもある確かさがある。加藤氏の政治学が、丸山真男氏や田口富久治氏のような「政治的自由主義」（戸坂潤）のすぐれた伝統の継承者であることは間違いない。現実政治にコミットすればするほど、ともすればマキャベリズムやプラグマティズムに左右されやすい。だが、現実から遊離した政治学は書齋学とはなり得ても、人間の社会的課題解決の処方箋を示す厳密な学としての実践学は成立しがたい。そのような希有の学問の担い手の一人として、加藤氏に注目し続けたい。

【さくらい・さとし】一九五一年生まれ。
自由業。